丹鶴叢書

萬代和歌集 十七 十八

093.1
2006
佛教大学図書館
2005494569

萬代和歌集卷第十七

雜哥四

元慶九年宇佐使に菅原清遠のくるさま
をみて　　菅原言光

続千載旅

[illegible]

菅原駅伝和尚倭中をゆくくるをみて
兼盛

[illegible]

冷泉院御製

新続古今別

[illegible]

明治文庫

清少納言　　藤原助信朝臣

新後古今別

[illegible]

和泉式部丹後に[illegible]

[illegible]

上東門院

玉葉旅

秋[illegible]

式部命婦

[illegible]

四条太皇太后宮

新後古今別

[illegible]

式部命婦

続十載旅

[illegible]

按察使の任

同旅

[illegible]

中納言敦忠

新後拾遺別

[illegible]

業平朝臣

続後撰恋三

[illegible]

清原深養父

[illegible]

延喜帝御製

続十載旅

[illegible]

新後拾題不知

権中納言敦忠

続後

[illegible]

同　素性法師

[illegible]

続後撰雜中　ゑ 続後　同上

あきのよのつきぬるかぜのいとはしき

とこのつゆかはかなくもあるかな

西院皇后宮

続後拾遺雜中　久 続後拾遺

ちりぬるはなのかをとめていとはるる

新続古今別詞書　新続古詞書同

ちるのこる

上東門院

新続古今別

いとはるるはなのかをとめてたちまさる

いとはるるまけるはなかをとめてとまる

ちりけるとこのはのなかをたまはて

（一本）

肅子内親王

続後拾遺恋三　と 続拾

ちりぬるはなとたのむとしるかとしてこそ中のふるまはぬ

まこもちまま

ちりぬるはなのおもかげとしてこそ

三之女

続古今別　と 一本 続古

ちりぬるはなのかをとめていとはるる

ちのこるまでけるかな

長結

同別

うるはしきはなのかをとめていとはるる

とはるるはなのかをとめてはるるかな

和泉式部

続拾　と 一本 続古

ちりぬるはなのおもかげとしてこそ

新後拾　ちりぬるはなのかをとめていとはるる

新後拾遺別

新後撰別

前大納言光敎

題不知　八条院六條

続後拾遺別

空城門院丹後

続後撰旅

西行法師

新後　別のこと

続後　別のこと

新後撰別

基俊

同別

藤原顕仲朝臣

続古今別

新後拾遺別　権中納言師時

宇府にまかりける時人のもとにて

太宰大弐実基

続古今別

こひしさは八ツ時より
いきの松たちて

続古今 別
わかれぢに…
寂昭法師
つまにしけるに
性空上人

続後撰 旅
…
成尋法師
…
読人しらず

同 旅
思ひやる…
恵…法師

続後 名所百首歌
…

続後拾 右大将…
…

新続古今 旅
まくら…
重保三條内大臣
信正朝臣

続後撰 旅
藤代のみさかをこえて…
入道二品親王道助
家五十首歌に
源家長朝臣

新拾遺 旅
宿もなき…
勅使にて…
後京極摂政太政大臣

続後拾遺 春上
吉野の…

続千載　名所百首の内

正治百首　三條入道左大臣

ゆきまつむ弱竹ふかき人家を又このうへのふるさとやたれ

太神宮百首を給はる時の御歌

後鳥羽院御製

秋ふかき月の光のいとうすき霜ふる袖のうへ

旅宿の月をよめる

法性寺入道前関白太政大臣

形見の袖やたれとなるらん旅の空まつ宿の月

建保三年内裏百首

信正卿

新拾　元久元年七月　治承三年の比の百首の歌

続千載　秋上

秋の月の後の秋霧の題を旅の人の袖の月

秋田刈てといへることを

仁和寺入道二品親王覚性

刈てとまたたくまもなん秋風をしるものある稲の穂

正治百首の中ふ　建保時代

くれまさる大空宿るいなの穂の角田の面の秋の月

二品親王雅成

続後撰

旅人の宿はまつとは思ひ出てまつ宿なれん

後鳥羽院御百首　治承三年作るの歌

旅ゝ

六条入道太政大臣

新拾遺抜

いかなりしさとりの山のかなしさは枕のあなたなりけるの事

藤志法師

秋ふかき宮の杉をおもひやりて接ひの宮ふ月のこゑ

（一本）

洞院摂政家百首歌

源家長卿

ものの哀ふけ行くまくらもとのさよせぬ夢のたまつる

（三一本）

宮治入道前太政大臣の馬の湯をまいらせ

侍りしとき山居晩鐘

平親国卿

山陰の松の日数のふるまゝに時雨もなれる秋の哀

続古今　建保四年百首

続古今　建保四年百首

時雨しぐるる日光院にて

素性法師

雨ふれば紅葉のかゝるかさもなくて立田姫（やどり雨）

（ちはやぶる神の）

紅葉なりけり

建保内裏歌合

信西行家

新続古今

いにしへの人のこゝろを神代にかけてしるべかな

続古今

（小倉）

たゝぬ風さむしもの音ふかくして月ぞ宿かる

洞院摂政家百首

前大納言為家

新拾

新拾遺抄

祝部成茂

[illegible]

権中納言国信

道芝の露ふみしだく袖さえて秋ぞ深くもむすぶ

寒草踏しだく

左京大夫通季

[illegible]

大炊御門大夫

[illegible]

桂信濃道勝

[illegible]

於の[illegible]

後恵法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原隆信朝臣

[illegible]

十五夜の[illegible]

藤原為氏朝臣

[illegible]

二[illegible]

藤原経衡

続後撰旅

続古今旅

右大将頼朝

生昭法師

続後撰旅

之続後

続後千同

前参議為定

正三位家衡

新後拾遺旅

新後

高階経敏

後村上院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新続古今旅

[illegible]

善光寺[illegible]

[illegible]

続古今旅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

続後撰旅

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院[illegible]

大蔵卿為家

新[illegible]

日吉社[illegible]

右兵衛督基氏

[illegible]

[illegible]

従二位家隆

続古今旅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ときは山のいはやしこさへ八百万のかみのかけもなし　一本も
まいしらすて　仁和寺入道二品親王覚性
いつまてかこゝろをとめんよそにみて旅のゆくすゑさしもなき　一本さき
五十首哥中に山旅を　入道二品親王道助
峯まよふみ山のあらしよそにてそ重ねて里の夢もたえけれ　一本とまりし
十首哥の中に旅宿嵐を　権大納言忠雅
草枕ゆめのうらひちのゆくへもよその嵐にさめやすき　一本さ
権大納言公相

続後撰旅
あしかきのさやけき枕の夢の跡八重ふきかへすもなし
羇中月といふことを　右衛門督通成
玉葉旅
旅人のとまる野原の露おちてやとるもあかぬ秋の夜の月　中院入道前内大臣
入道二品親王道助家五十首哥に羇中月を　正三位知家
続古今旅
むさし野のはてまでのかきりこそいつるもいるも山のはの月　八一本続古
わけいりてむかふ山こえける白雲のうへに出て
前大僧正行意
続後　大峯にてよみ侍ける
続後撰雑上
いにしへにかはらぬ道は山路にて人もまよはぬ
わけなしこえてしらす　続後

人のもとにさとのくらゐなりしかばこの侍の中に
八道の按察使大江の朝臣の所にて
従二位家隆
のぼりぬ山路の月やあはれなる本の雫の昔くもるる
続古今故
白雲をたちまちのとぶとこそいまさらにぬ故郷をけふ
藤原定家朝臣
正治の百首歌
大納言為良
さるくといくたびとしぬ岩根ふみ苔の衣の山の風のしら雪
宰相中将
白雪の山路のまてはかりはしのしはるとふる
万

続古今故
藤原為家朝臣
新後拾遺故
たちそ原下草折しき山路の露のかたみとのふるもつてをぬる
藤原信実朝臣
続古今故
まてきちぬるかの夕つくしたちそ花さくを
（諸本脱以二本補之）
石清水社合歌
権中納言長方
かやの秋ふ雲ちりみるのこるまてはるさめ故おもかれと
（元一本）
中務卿宮
春いきてふ
源頼
ほのぼのとあけぬるかたの月ちりて稲原のかすかに

続古今故
藤原為家朝臣

新千　羇中のくと

新千載旅

石ふねのあと絶にし河よりもそらにさやかにかへるやまかせ

蓮生法師

洞院攝政家百首に旅を

従二位家隆

新拾遺旅

立田山よそにみえぬ大よどのこゝろとまりに船やつなかむ

くれぬとて浪にしをりてとまりても

堀河院中宮上総

見しこそはさは秋のよの浦風に旅ねもゝとまりけむ

郁芳門院侍従家にまかりけるにまかりけるとき

月をみるかな

六条右大臣室

うき風のまへにこゑ浪よする旅ねしく浪の枕にいてそねられね

旅泊といふことをよみ侍る

従二位家隆

続拾遺旅

おきつ浪よるさへ浪のうらなれて浦さゆるさへ夕やまひこゆらむ

秋泊といふことを

仁和寺入道二品親王　覚性　小一本

船とむるたこの浦の夕しほに霧こめてゆく

海路眺望といふことを

権中納言長方

松風の音のさえくれは浪路もとくとてやすらはぬ也

遠いしらす

左京大夫顕輔

こきいつるまのうら人のとまりにも風をさまる

結因法師

海路鳥　源重房

前大納言隆季

正治百首歌

藤原家長卿

後鳥羽院御製

新続古今歌題不知

続古今歌

入道二品親王

参議雅経

源家長卿

大蔵卿為房

続古今歌

五十首ノ内歌ナリ

二品ノ親王ノ

王乗歌

玉上結ようのうたとて
[illegible]
とりて侍る十月
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

菅原孝標女

玉葉旅

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

杉垣堀

[illegible]
[illegible]

藤基法師

[illegible]

[illegible]

権中納言長方

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

入道二品親王家五十首歌

[illegible]

藤大政大臣

[illegible]

続後撰旅

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

従三位保季

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

続後拾遺秋下

[illegible]

[illegible]

源家長卿

[illegible]

平政村卿

[illegible]

月毎のゆうべの伊つきに桂こうもりてゝ
ゆく人
安信性能記
はるゝ山まさらはしの正風かたちもまこと出る毎人
西行法師
ゆくゆく毎人いとこゝろとゝまりてとまるこゝ
従二位家隆
こゝろのゆくゝまるまこと毎人のかゝる伊勢風むこと
住吉社ゆまうてゝ人のかゝるいもつもる
法師人道寂蓮
新人みやこゝゝ伊のもゝまこゝのゝこゝゝこゝゝ

ゝこゝのまこゝ井ゝ藤のこゝろを
後法性寺入道前太政大臣
延ゝのまむいゝの宮中の藤ゝ花かゝるゝゝゝのまゝゝゝ
藤ゝ十五ゝゝゝゝ伊ゝる中ゝ
後京極摂政太政大臣
つゝゝ月ゝゝのゝゝゝ新ゝゝゝ毎ゝゝゝゝ流のゝの岸
三十ゝゝゝ井ゝ藤ゝ
慈性大僧正
東ゝ中藤のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
五十ゝゝ新の中ゝ藤を

続古　後法性寺入道前関白太政大臣

仁和寺入道二品親王

権律師賢清

皇太后宮大夫俊成

続古今故

新千載故

西行法師

中原師重朝臣

住吉社三十首歌

従三位頼氏

前左大将実雅

続後撰故

百そぢにはよそぢたらぬに旅宿と 一本
権大納言公相
志なか鳥ゐなのさゝ原かりねして一夜も旅宿とふ人は
なれくしてもなを侍らぬ人のかはらふくむ
つかへ侍る　前大僧正行尊
草枕此の度志らず旅寝もめぐりあふべきかたらはぬ
大峰とてかくる時よみ侍る
前大僧正覚円 一本
思ひつる人は旅寝とおもひて出しよりけふの空もまた
枝のたのみ
貞覚上人

続古今旅
ほまてきかんと思ひおもひとをいそぐよに思ひやるこの
伊勢ゐへくるまけるしみやてのそのおもてぬ
ぬるとかたちをかく　大江ちかえ
ふるさとへいそぎて旅寝とおもひなかむることの里に
ありしへおもはけるそこよくよめる
祝部成茂
たびとくしあさちのはらゆうの里の
前摂政家にて　正三位知家
草枕月さへふきぬるひもやすみかはるけき猶あふさむ
秋風しまつるるまく

万

菅原孝標女

待賢門院堀河

羇旅（続後撰）

久安百首

羇旅（続後拾遺）

羇中暁思

俊頼朝臣

大江嘉言

平兼盛

津国

宋朝

戒覚上人

新続古今　建保二年八月内裏歌合　秋歌

藤原定家朝臣

思ひきや虎ふす野べの草まくら露ぬれぬとは袖ぬれぬとは

新続古今　建保二年八月内裏歌合　秋歌

藤原頼氏

西の山ぬれぬ袖の秋の月ぬれぬ袖の秋の月

玉葉　秋

藤原為世

建保内裏歌合　秋十五首歌合

大納言通具

新続古今　秋

しらぬあはれ

藤原定家朝臣

後法性寺入道前太政大臣

ひさかたの月の桂の秋の夜の天の川原の千鳥なくなり

玉葉　秋

同院摂政前太政大臣

いつかはと思ひ初しかたの月の桂の秋の夜の千鳥

建保二年内裏歌合　四鞍中納言

後久我太政大臣

法の月ぬれぬ袖の風の音を聞くとはなしに

為氏

前大納言為氏

[illegible]

八月十八夜の
おなじみ侍る体撰のうち
　　お大納言為
せめてなを侍らしとおもひ撰み侍るむ
春のうち撰ばれ月とこそ
　　いつしきぬ
新続古今旅
夫のまの月をはつるもなほ撰みあり宿をこそ
　　まつしらん　　お大伝正行
[illegible]

続古　撰のうちと

続古今旅
[illegible]
　　道濟
　　嘉言
同旅
[illegible]
　　能因法師
[illegible]

萬代和歌集卷第十八

雜哥五

聖德太子

[illegible]

偽正善珠

[illegible]

玉葉釈

[illegible]

伊勢

同雜四

[illegible]

和泉式部

徒後 [illegible]

続後撰雜下

後一条院のくらゐさりをおくり後月あらも
なるおとゝのみはかる　五節

風雅雜下　上東門院五節

さゝらふる月を涙ふくるとて昔こ世のくもやはをる

三条御内侍

そのゝゝよのまゝるおとゝ月も涙ふるさるあらん
おなじころくらゐをおりさるとゝ

中将内侍

玉葉雜四　後一条院少将内侍　ふ玉

くもまくもゝゝとへんと思ひぬとゝもむくそゝもおとゝぬる
そのゝゝ清涼殿ゝゝけるとゝく

後朱雀院のゝ

後朱雀院のくらゐさりをおくり後月あらも
ふ月七日とゝのゝ

玉葉雜四

ゝ月とゝもいゝゝゝ
次のゝゝの夜よりをおくる

玉　後朱雀院の四ゝ
川後ゝ
ゝ四月ゝ
ゝ本ゝと
ゝゝ

続拾 ほとゝぎすなく きおもひつゝ…
四条太皇大后宮ニ まゐらせ給ひける

玉葉雑四
しらく　　元暦御製

ふるさとにまかりしにもさらにこそ人をとはれけれ
堀河中宮をさきだて給ひけるをなげきて
中宮もとく　　四条太皇大后宮

続古今哀 二品尊子内親王
かめやまの山をあふぎし人よりもさきにをくれし君を社思へ
御返事　　圓融院御製

同哀
尋ぬべきかたもなき山のおくなればいまやいかにとおもひやるかな
まいらせ

続拾遺雑下
くもゐにもいかでかすまむ…のやどをたづぬるに
贈皇后宮の母をはなれて後二月許りに

続後 延長八年云々

みちのくの…御後しらく　　堀河院御製

続古今哀
梓弓やまのあなたへしかさむ杜若なる人のつかみなるらん　の続古

中務卿親王 具平
続千載雑下
世中をいつかうきよとおもひけむつゐにはさらぬならひなるらむ

源順の母のおもひにてはべりけるに母につかはしける　　中納言兼輔

続後撰雑下
よそへてもむかしのことを待るなる杜とおもひやるらん　ヵ家続後

むかしの人のおもひ待るころ　　中納言定頼

たらひるく出さあらて世中ふかくてこゝろ口の正直なる
母のおもひて侍ることをこのみをけるとて

民部卿成範

ゆるすらんあてやこゝぬる法師のあをにさしをかさ世をしのぶ
おやの思ひをくみ給ふまゝに佛經供養
するとて詠る歌

道濟

玉葉雜四

かつらくはまつたちそをとゝはゝ法ふあまんとをうん

民部卿信範

よめる

言階經堂

きるらひよりあるへのまてをれたゝ一時の間あるけの

十月廿日あまてのこゝろ所作三位ひまて
侍るを紙くいひつけて家

周防内侍

続後拾遺哀

いひやくむことのまをあるまをのしてしたのふハ
をまをけるをのまてはをさと母のしゝ侍
家る孝行ゆまをくをつ

信正、水縁

こよをゝ元をぬをこゝ詠をこゝをひけれのよをの時侍

題不知　塔基法師

なのをもかくみをゝ人ハ侍のふをひをを侍もてををる説

父中納言通俊卿まうさく俊子の宮ま
くとのいくとして　仁俊法師
ちくのうの柴のおくに系のんうきこいつる身もなを
後三条院のくまさを始くのち大江三位
をふいむ書くる　ナ　将内侍
まうさ様おまうさくを五月雨の降まして係ふ係
おなじ中納言資綱つまくる
桂信西静因
続後撰雑下
夏陰うたうたうぬなくさむるるを聞ハ消ぬる
ほくうくうくて後母の三位まうをぬと

玉葉雅子内親王の三位
ふ侍くくくくの宮のくる
日もくくくのくふくつ
くもくる

ゆく服を侍て　儀同三司
そのとうくまくまを始をを社ふなる社
右を中将忠頼卿まうくを太子殿ふ
まうて法侍る　花山院入道お右大臣
玉葉雑四
ほのとしくくいみをくを社ふくを社ふ
三位て侍るまう日社ふをける日
蘭原言光
同雑四
社ぬをくふまうをいくをくを社の宮まるん
園勝院のくまさ始くの春くくく
よみ侍るくまを面を

玉葉雜四

按察使を任

堀河院のくもゐを拾ひて後三月ばかりに

右大将通房公

玉葉雜四

小式部内侍

玉右大将通房公

玉御門右大臣女

続拾遺雜下題不知

続拾

和泉式部

続古今哀

言葉上人

藤原成宗

続後拾遺哀

藤原隆祐

前大納言

続後拾 あひしりて侍りける人のみまかりてのちはよめる

新後拾遺雑下
いくちきを玉のをとしもみすてゝ（も 新後拾）おもひのこともなけれはぬる
おもひしり侍るころよめる

高陽院木綿四手

続後拾遺哀
胡乃しら玉ものかたみもなくなりてひやうさまもあきさ別ぬ（の 続後拾）
あはれよもよの中なれのはてにける

いつみしきぶ

新続古今哀
なき人を人のなかなる世のなかにわか身はかりそとやもてる
女院夏京述子のくなりて後はらからのよみけるを
御続しく

乙麿女製

こゝろには涙のこゝろなきわすれとゝめおきたる玉のちきりを

続後 よのなかはかなきことおもひ侍る

続古 万葉集の歌和し侍るついてに よみ侍りける

人のさためなきことを侍るおくりしかさし侍りて
よする

中務

続後撰雑中
秋よるはむさしかなくさ絶なむを思ひぬ人はえしもこそ
思ひしらす

いせ

同雑下
空なるを世をはかなきものなれと（とき 続後）涙こそ袖のうへなるかたみなれ

小まち

同雑下
をちかたくこゝろをはなれぬるあはれならはあまりむかしを忘れてそ（き 続後）（も 同上）

順

続古今哀
世中とはかなきものゝ風なれはいくよもしらぬ命のうちそ

太宰大弐高遠

小倉百人の歌の撰ばれたりしもあらぬ世と詠ん

二條院の内裏のおとゝのおもみ侍る

清輔朝臣

玉葉雜四

みてよふるとのゝふるさゝ濡ぬとこゝ又何の袖なるむ

かの俊成中納言典侍にまてまてとゝく

ゝとゝさふらひ給るゝいつもゝ侍る

前左兵衛督惟方

同雜四

かゝるとゝさゝの月とゝ玉く後よ者の秋とゝふん

二條院中納言典侍

同雜四

もかゝくゝ侍ゝゝと友ゝゝかゝる月とゝいぬゝ秋き

後京極摂政のくゝるくのちゝ中納言定

家十ゝゝおゝみくつゝゝゝけるゝゝ

の中ゝ

従二位家隆

たまゝゝる今ゝ後もあゝものとゝれぬゝ思ひて

六条摂政のゝゝ秋おゝまゝゝて侍ゝ

ゝ

藤原清綱

ゝゝゝたゝぬゝゝふも行ゝゝふゝるゝゝ又おゝぬる

服ぬゝ侍ゝる月よゝる

俊成卿

続古今哀

みゝゝゝゝ衣ゝゝゝゝ思ひ侍ゝとゝゝもあゝ侍ゝ

申いしらせて

藤原隆信朝臣

よのつねにみすてし杜つとりしあれはふるさと人はなきは

法印元性

さすらへ人はなきあれは世をすてし衣をかさね世をいとはん

法印智海

花のなきあくよをせんをよそとたまをなるき岸のくさ

法印海恵

きぬはいとふむかしを稲うしの身もなきのこつも

高倉院のくもゐさを花てのとしれ夫新中納言 権玉

言のかゝし梅をおりつゝし侍とく 実玉 々ハ字一本

三條入道左大臣

玉葉雑四 いろいのくらきを世とたてゝ梅のはなも手も同しよ侍らん

新中納言

おもへし

梅もとみてむかしふかきを花と涙のつゝる春のなかりき

按察使光親母のおもひし侍れると中納言光雅のかくしいひつかはし侍る

高倉院新大納言

玉葉雑四 とはさりしのきとぬ人はおもひけりとも志やなん けふ

正三位知家

八条院六條

そのへのよしさらなさそへなきけ世の果のまことにしてそ

続拾遺

二条院御かたの人々出家のとき雨のふりけるを隆信朝臣のもとへつかはしける

参河内侍

こゝやなほ雲ゐのつゆのかゝるらん袖とはしたいしらなん

中納言重保

藤原ためとしの朝臣の後の玉とめてたのもしき事もなし

二条院御製

続拾遺雑下

長歌のまゝにもとりもちゐるべきなりけるを見給へん

よ続拾

世のなかをかくこそみるやとなる月とこゝろ

拾遺集

万

玉題一千

藤原敏行朝臣

玉葉雑四

よの中にあるやとなる月をまちつるこゝろ

中納言

おなじ納言忠

雲もなきなかるゝ水に月をまちつるこゝろ

中納言定輔

ゆくへなきこの水ぶねにてもなかめよとなるこゝろ

花山院御製

玉葉恋三

むかしもいまもこゝろ

同上

ものをもこゝろ

三品親王雅成

同雑四

いとまなく人の家と見るこゝろ

こゝろ

[illegible]

堀河院中宮

徒後拾遺哀

[illegible]

上総

[illegible]

さうの[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

前大僧都穆義

[illegible]

法橋円圓

[illegible]

俊子

思ひきやうきよのかぎりとふまでに法師になりぬるとも

この歌

一條

あきの人をまちかねぬるかとて中ごろの月をみるにつけても

さもなめりなるとしのあきはまちなくかぬ

よるのみぞしらん

続後拾遺哀

くもりもなくいるかとみるまでに月はあきらかにてまちよ続後拾

いとどこの月まちるにいるさつよみ侍る

ところ続後拾

そこ歌法師

続古今哀

もうおもさは世のなかとてもあくさめつゝ思ひとしぬる

鳥羽院のくもさを思ひのもらんこゝろ侍

万

新十載哀

おもひたちかつらぎ山の月をみるにつけても

薄原ゆき方知ぬ雲かをのる業集の抄

とのゝまくに侍るとを思ひもよらぬあとふの

法のそらかとゝ

平たゝ度知ぬ

みちゝ世をいとはしさとゝかんかをきてこゝをとかくみとゝ人思こと

この歌

薄原ゆき方知ぬ雲

こゝてもなくなをぬるあきの人のかゝみとゝのふくさの花

塚の院のくもさを知ぬ侍

権中納言国信

続後撰雜下題しらず

思ひのこすことのはもなくて侍りしころ三条関白のむすめの女院のもとにまゐりて侍りしとき

枇杷皇太后宮

春

うけはとりもてゆかぬ身の恨さへ春の月とあらそふるかな

実房卿

春ごとにうつりかはるけしきをば

なほ山院内侍

玉葉恋三

空ゆくもとまるかたをとのとはばこそ

藤大納言良

同雜四

きてとはぬ人をあはれとおもふにも

続後撰雜下

あきの歌とてよみ侍りし

光の為

結び置てそふ　信実卿

ゆきいしらず

藤原伊長卿

あきの人とはいはれもあるべきものなれば

藤原季宗卿

人のこひ侍るとて

なるべきこひなれば

卜部兼直宿禰

なるこひ侍りし

藤原季宗卿

まことにあはれなるこひ侍りし

人のこひ侍りしとき

ゆきいしらず

あはれなるこひ侍りし

大峰にまうでゝ侍りしときさくらのいまさかりなりしを
くよめる　　お大僧正行尊

やとりてさくらをこそとかぬはしたにあるさくらをおくるるをさくる
を吉帳をくよみ侍る

法印隆誉

嶺の余雪も消ぬとまるおく山ぢにぬるゝ袖をぬるゝやとのあさこるとゝく

　　吉法師

柱おきし杖もいそぐもうゝぬふ苔の人をいとなるむ
おやの恩をよみ侍る

杖をふるとしとをつゝみ侍りし　　一本

人もなをやまうおほえるこゝろ詠をのべく
とゝく　　和泉式部

郭公ゝひきてきてのゝこえハけ世のきる人をもむ
世中のはぬあきをとゝひくよめる

　　殷富門院大輔

玉葉雑四

ものもゝ咲てハちるぬ杜の月をもてたかるぬあ外う世の中
久あをそゝ　　上西門院兵衛

同雑四

いつまてとのとふあとちゝんはのまをふきぬ秋ゝ　　と本
ちゝ家はゝ中ふ　　柱中納言国信

[illegible]

観身岸額離根草 [illegible]の文字続後拾

[illegible]

和泉式部

続後拾遺哀

[illegible]

後一条院[illegible]

二條院の一品宮と申る[illegible]

宮 内

千載哀

[illegible]

式部親王 [illegible]

[illegible]

西宮女房

玉葉雑四 女御徽子女王

[illegible]

梅園女房 壺 続古

続古今哀

[illegible]

従一位源倫子

玉葉雑四

[illegible]

前大納言[illegible]哀

あむらもるも爰のんちく保をそうてあるる
を今法ず
うる人ハ高なく名ぬ秋をれとをふをいをんををらん
蔡京基堀

続後撰雑下
鳥羽ゐあるふひ一ををふ月日へうををみあるる
洞院摂政のくををこの又のをしよみ侍る
原を長秋(ナシ一本)
人のをと春の爰をを学ををのやよひたのふを民
藻壁門院のくををを拾遺(ナシ)後撰(ナシ)同上
ぬをををを人のををへて侍るををる

続古　光俊卿三十二
ゆけるる百そをのの中ゐ

続拾遺雑下　後堀河院民ノ卿典侍
夢の爰を別くはのをむををいるのをよをを果て(続拾)ふををん
寄る情四をををを
後二位家隆
ををみをる板のをを八里をも昔の人を恋を
結縁法をを　前大納を為家
続古今夏
たを秋のなをむはの出をを恋ををも打を恋を
往事心爰ををる
従二位(二続拾)顕氏
続拾遺雑下
をををを一おの夢をを(と続拾)ををを花おやのををめを後を人を

和泉式部

徳古今哀

言光

徳古今哀

殷富門院大納

同哀

高辻上人

新後拾遺雜下

西行法師

新千載哀

出でつる秋を待ちよろこびけるとて

月のすむ山の端ゆ秋ぞ入んうらみもあらぬ宿ぞ淋し

是八修理大夫顕季卿まうでゝ侍りし人の

愛でゝこゝるおもんか

秋風の稲葉のおとゞさやぐいてゝ宿と出るぶ

この歌を堀河院の御時をぢくの中

中ごつ右大臣の愛でゝこゝを侍りける

ぶうこゝろ